

# 座談会「非営利・協同と宗教」

## ●なぜ医療NGOに 取り組むのか

司会 この座談会は「非営利・協同と宗教」というテーマですが、もともと非営利・協同という分野というのは、その発生からしまして宗教と非常に関係があるものと思っております。

また、NGOそれからNPOの分野も、この非営利・協同の一分野であろうかと思っております。たとえば国連で協同組合というものが世界最大のNGOだというふうに規定しておりますけれども、日本でも、たとえば賀川豊彦というキリスト教の人が、政党をつくったり労働組合をつくったり、無産者の診療所をつくったり、農民運動をやったりということで、非常にオールマイティーな活動をした人がいて、彼が目指したものは、やはりこの当時の世界的な思想である、今われわれが言う非営利・協同の運動ではないかなと思っております。

そういった伝統を引き継いで、私たちの非営利・協同組織運動というものを考えていこうということで、今回掲げましたテーマは極めて新しい、あまりこれまで取り上げてこなかった問題かなということで、あえて「非営利・協同と宗教」ということでお話をさせていただくと。

まず、若井先生は、『平和・人権・NGO』などたくさんの本と論文、報告書を出されて、これはもう列挙できないぐらいいろいろお書きになられておりますけれども、先生から国際保健医学、それからNGOというも



### 座談会出席者

若井 晋 (わかい すすむ、東京大学医学部国際地域保健学教授)  
日隈 威徳 (ひぐま たけのり、宗教学者)  
高柳 新 (たかやなぎ あらた、研究所副理事長・医師)  
司会：石塚 秀雄 (いしづか ひでお、研究所主任研究員)

の現在の役割について、先生のお考えやNGOになぜ熱心に取り組まれているのか、お話を聞けたらと思います。

若井 わたしがNGOに関わりはじめたのは、まだ世の中がNGOという言葉を知らない時代だったので、私はキリスト教徒なので、日本キリスト教海外医療協力会という、日本でもかなり早い時期に設立された、すでに40年を経過している保健分野でのNGOに若いときから参加して、私が卒業してしばらくしてその会があるのを知り、参加しました。

1981年にその団体から台湾に派遣されまして、1年間そちらで働いた経験があります。その関係で私が、この団体の責任を4年間臨床を辞めて、といっても臨床も多少やっていましたが、その事務局をやりました。

そういう関係で、その後もNGOに関しては関心をもっています。他のNGOに関してもかかっている次第です。

そのNGOとNPOという言葉が併記される形でいわれていますが、私は全然違うと思っているのです。これは私の主張の1つですが。

NPOというのは単に、非営利ということ謳っているだけであって、政府との関係で自分たちの立場はどうかということは何も言っていないのですね。

高柳 この研究所もNPOなのですか。

若井 NPOが、その明確な政治的主張を持っているかどうか重要です。政治的という意味は、良い意味できちっとした自分たちのよって立つ基盤をもっているという意味で、もともとのNGOが発生した根拠はそこにあります。

最初に、英国でNGOというのが発生して、かなり大きな力を持っているわけです。そういったところでは、明確な政府に対する政策の違いというものがある場合には、それを批判するとか、批判的に対峙している。あるいは、一緒にやれることはやるというようなことが明確になっています。日本の場合は、NPO法人という名前です。ひとくりになってしまったために、そういう意味での政治的な自分たちの信念とか、方針が曖昧になってきているのではないかと思います。

司会 先生はこういう運動に、ご専門の脳神経外科というようなことをちょっと差し置いてというか、それと一緒に、同時に、いろいろな第三世界の人たちのためにやってきました。先生の個人的なヒストリーといいますか、どういう思いでNGOといった運動に挺身なされたといいますか、そういうところをちょっとお話いただければと思います。

若井 私は、最初卒業してから医師になって、研修を2年ほどいたしまして、そのあと外科が自分は向いている、と。中でも脳神経科というのは、まだできた頃のかなり新しいところでした。そこで面白そうだということで入ったのです。

その後いろいろな紆余曲折を経て、基本的にはその頃からすでにNGOに関わっていたということもありまして、1981年に台湾に行ったのも、NGOの日本キリスト教海外医療協会というところから派遣されて台湾に1年間行ったわけです。それは、自分の専門の脳神経外科を行ったわけです。

私のライフヒストリーというか、ずっと脳神経外科をやろうとは思っていなかったのです。

自分がこの年にはどういうことをしたらいいかということはある程度頭に描きながらやっていたものですから。外科医というのは非常に短命ですから、そんなに長くは自分でプラクティスできないですね。

私も実際に脳神経外科医としてやったのは10年そこそこです。そのあとNGOでやったり、そのあと幸いなことに大学で教えたり、研究したりするチャンスができてきたわけです。

そういうなかで、私の今のライフヒストリーの最終的な段階として、世界にどうしてこれだけの不公正、不公平な構造があるのかということ、これはNGOの立場からもそうですし、私が国際地域保健学講座というなかで、国際保健の働きをしている理由は、とくに発展途上国からの留学生が半数いる、その人たちと、日ごろ英語で全部コミュニケーションするわけです。そういった第三世界の人たちの、実際の現場も私ももう何百回と見ています。そういったなかで、そういう不公正を、私たち大学にいる者も、大学にいない人たちも、NGOの人たちも、どうしてこういう不公正がその世界に存在しているのかということ、きちっと1人ひとりが認識して、それに立ち向かっていくことが必要である。その意味では、国際保健学というのは非常に政治的な意味を持ったアプローチをしているというふうに言っても過言ではありません。

実際に欧米の有名な医学雑誌にしても、そういう点では、非常に社会的な関心が高いのです。それにたいして非常に悲しいことに、日本で発行されている医学雑誌は、そういう世界の問題などは扱わないで、非常にテクニカルなことを中心にしています。東大の医学系研究科のなかでは、ほとんどがバイオメディカルリサーチで、「ネイチャー」などの雑誌に出すような、実験系のものが主流なわけです。

そういったことは、自分たちの関心としてはいいでしょうけれども、世界の62億の人たちのうちの、ほんの僅かな数%くらいの人たちにしか利益をもたらさないということに、私が力を注ぐことは全然意味がないのではないかと思います。

今の職場で集中してそういう問題を、どうしてこのような、健康に関しても、それからさまざまな自分たちの発言とかそういったものが、発展途上国を中心に、ほとんどの国で、むしろ疎外されているということに何とか立ち向かっていく。

実際には、私たちが研究をやっているのも、だいたいそういった視点を基盤に据えてやっております。

## ● 宗教は本来非営利である

司会 私どもの非営利・協同セクターというのやはり、社会的連帯ということが非常に重要なテーマなのですが、往々にしてコミュニティということで、非常に顔の見える範囲でかなり止まってしまう、グローバル化の視点が弱いというところがあります。

続きまして、日隈先生はインド哲学からスタートされたということですが、人権とか平和とか、われわれがスローガンに掲げている問題について、宗教的な立場、とくにアジアの世界で宗教者が果たす役割について、まずお話をお願いします。キリスト教の人たちは比較的ミッションで外に出て行くと思うのですが、アジアの宗教というのは、その点がまだまだ不十分と言っていいのかわかりませんが、あまり政治的な問題にコミットしたり、貧困の問題に大きくコミットしたりするということが、歴史的にキリスト教と比較すると相対的に弱いような気がするのです。平和とか人権といった問題を、今後どういう方向をとっていけばいいのか、先生がやってきた由縁も含めながらちょっとお話いただければと思います。

日隈 この座談会に出るようになると高柳さんに言われたのは、私がNGOにもNPOにもほとんど関わりのない平均的な社会人だと思われたのかもしれませんが。



もちろん、関わりはありました。たとえば、先年亡くなったキリスト教の関屋綾子さん、仏教の近江幸正さんらの宗教NGOといたのがありました。反核

平和運動の大事な一翼を担ったのです。今ちょっと開店休業状態になっていますが。

一方では創価学会も国連にNGOとして登録されていますし、立正佼成会が中心になっている世界宗教平和会議というのがあります、これもNGOです。立正佼成会の庭野財団もNGOになっている。それから、かの悪名高い統一協会も、世界平和女性連合の名でNGO。こういうものについての関心が、それなりにいつも私にはあるわけですから。

数年前、営利を目的としない民間の団体に法人格を与えることを目的としたNPO法が制定されましたときに、文化関係の仲間たちは、NPOの議論をしていましたが、あの17分野の中には宗教は入っていないのです。

若井 そうでしょうね。

日隈 宗教法人はすでに税法上の優遇措置を受けている、公益法人とみなされているわけです。宗教法人は、本来、非営利でもあるわけです。

若井 そうですね。

日隈 営利をやっているところも結構あります。

高柳 お寺さんなんか、建て前と違うところもある。

日隈 営利団体以上に上手なところもあったり、あくどいところもあったりしますが、建て前は非営利です。宗教団体イコール宗教法人ではありませんけれども。

私は日本共産党の宗教委員会で長く働いていたのですが、共産党と宗教というのは一番縁の遠い存在で、いわば水と油、かたき同士ではないか、といわれたのですね。共産党が勢力を増してくると、宗教活動が侵害されるとか、いろいろな誤解などがあって。それからわれわれの方にも宗教に対するせまい見方もあった。それらを克服し、平和や人権に立ち上がっている宗教者、宗教団体と協力、共同するというのが、私たちの課題です。だから、この研究所の非営利・協同というスローガンは、

そのまま私たちのスローガンでもあるわけです。

私は、学生時代セツルメントをやったのです。当時1957、8年の頃、後にブント（共産主義者同盟）、これは安保闘争、60年安保で破産した学生組織ですが、当時は、日本共産党に代わる革命組織と彼らは考えていたわけで、セツルメントのなかにもそれが影響して、地域転換論争があったのです。私たちは世田谷の引揚者住宅、当時の日本の、まだ貧困地帯です。そこでセツルメント活動をしていました。しかし、こういうところでやってちゃ駄目だ、日本の革命運動の担い手は労働者階級だから、もっと労働者の町に行かなければいけない、と。学生は、そういうものを指導するためにそこへ行くべきだという、簡単に言えば、セツルメントの場所を転換しようということですが、学生イコール革命運動の指導者という思い上がりがあり、これには私たちはもちろん反対した。だから私たちは地域主義者あるいは地元主義者といわれたりもした。後に東大の教授になった広松渉氏は、筆名で『日本の学生運動』（共著）という本を出していますが、この中に、セツルメント活動というのは、本来、ブルジョア的イデオロギーに立脚するもので、女学生的センチメンタリズムだ、救済事業で資本主義の諸悪が解決されるという幻想を植えつける反革命行為だと規定しているのです。

大学を出てから今日まで、原水爆禁止運動や信教の自由・政教分離を守る運動で、仏教、キリスト教、天理教などの方々とずっと一緒にやってきました。

当時、世界を動かしている原動力は何かというところ、これは3つあるというのが、われわれの常識だったわけです。第1は、社会主義の世界体制。第2は、資本主義国における労働組合運動をはじめとする変革の運動。第3が、民族解放運動。第2次大戦後、植民地体制が崩壊し、1960年に国連の「植民地独立宣言」がありました。

司会 60年代は、植民地解放の時代ですね。

日隈 植民地解放の時代だった。この3つが原動力だと。いま社会主義世界体制はなくなった。しかし、世界資本主義の矛盾は依然としてある。南

北問題といわれたアジア、中東、アフリカ、ラテンアメリカの貧困の増大の問題はますます大きくなってきているわけで、そういう意味では、この1月の日本共産党の第23回大会で、今の世界情勢の第1に植民地体制の崩壊を挙げ、非同盟諸国の運動の発展と平和の国際秩序の重要性が指摘されているのはうなずけます。

私たちは、第2次大戦後の新しい植民地支配の方法や形態のことを新植民地主義という言い方をしてきたのです。つまり、一応形の上では独立させるけれども、アメリカなどが経済的、政治的にもその国を握り、軍事援助や軍事同盟で反動政権を支持していくやり方です。その頃、アジア・アフリカ研究所というのが東京に設立され、先年亡くなった岡倉古志郎さんが所長、私はその所員になりました。

当時は、アジア・アフリカの経済の自立が大きな課題でした。自力更生というのがスローガンになって、そのアジアの自力更生に対して、日本の経済力がどういふふうに関与できるかというのが1つの問題でした。

そしてアジア・アフリカ連帯運動の経済版を目指して、アジア・アフリカ経済委員会というのができまして、私はそこからスリランカに派遣されることになったのです。ちょうど64、65年、大学院を一時、中退して。スリランカのバンダラナイケ内閣が、中国やその他アジア諸国との友好関係を結んでいる。そこで、スリランカにビューローをつくって、日本からビューロー員として派遣されることになったのです。ところが準備している間に、バンダラナイケ内閣が倒れちゃったのです。

高柳 面白いよ、先生の話。はじめて聞いた。

日隈 それでビザをもらいに大使館に行ったら、おまえにはビザは出さないというのです。そこで私はまた大学院に帰ったわけです。そういうことがあってアジア・アフリカ研究所に入った。

しかし、宗教の分野のほうがいよいよ忙しくなり、党の専従にもなったものですから、研究所は、一向ご無沙汰していますが。今でも名前だけは所員です。

そこへもってきて、ここのところの世界情勢の

変動の中で、とりわけNGOの諸分野での、諸地域の活動を見ていて、うーんと思ったわけです。

つまり私たちがあのころ、たとえば世田谷のどこかでセツル活動をしていた、それが世界的な規模で活動するようになったのだなという風を感じたわけです。

私たちの世代は世界に出て行くということは考えられなかった。だから小田実氏の『何でも見てもやろう』は刺激的でした。研究所の学生たちが夏休みにアジア・アフリカに出かけていくというのにショックを受けてから30年、40年たちまして、国際的なそういう活動に日本の若い人たちが参加してきていると。

## ● 地域活動の担い手としての 宗教系組織の伝統

司会 セツルメントの話は、お医者さんの加賀乙彦さんが最近出された小説『雲の都』の中で、ちょうどその頃のセツルメントで今おっしゃられた批判があったことをエピソードとして描いています。例えばイタリアで今、社会サービス、介護、障害者運動の社会的協同組合というものがつくられているのですが、それらは90年代くらいからすごく伸びてきたのですけれども、やはり日本の50年代と同じような議論がありました。すなわちイタリアではカソリック系のグループがそういうことに熱心で、それは白い協同組合といわれていたわけです。一方、赤い協同組合というものがあって、イタリアのレガという、非常に政治的にも強い社会党、共産党系の協同組合グループがあって、社会的連帯の協同組合については後追いになっていた。その考えはやはりセツルメントの時と同じで、つまり労働者中心だと。社会的弱者、ルンペンプロレタリアートはあまり政治的パワーはないから、相手にしないわけです。マルクスの時代の発想とよく似ていて、世の中の社会的弱者に視野がなくて、やはり中核であるワーキンググループを中心にやればいいんだというところがあったと思うのです。

現代はやはりそういう視点ではもうすでに世の中は変えられないということで、もっと広い社会的連帯の、われわれはスローガンとして非営利・

協同とっているのですが、そういった社会的連帯のあり方が必要だろうと。この非営利協同セクターで有名なものは、今いったイタリアのそういった社会的協同組合、カトリックグループの推進するもの。それからスペインにモンドラゴンという、これは労働者の自主管理の、労働者協同組合というものです。労働者企業ですけれども、5万人クリアの規模があるのですが、これの創設者もカトリックの神父さんだったわけです。カナダのデジャルダ運動という、銀行を持って総合的な活動をしていまして、それから第三世界に対してかなり支援活動、NGO的な活動をしているグループがあるのですが、これもやはりキリスト教的な理念をもっている。

日隈 カナダのどこですか？

司会 ケベック州です。フランス語圏であるのです。反グローバル化で、ヨーロッパでは若者がかなりそういう反対運動をやっているのですが、日本の学生などはそのへんの感覚は非常に薄いという点では、日本の問題点かなと思います。



高柳 セツルメントの話があったので、ちょっと笑話のような話をしますけれども。

1961年に私は東京医科歯科大学の教養に入ったのです。それで最初にやったのはセツルメントだったわけです。日隈先生などはお分かりだと思いますけれども、文京区などといっても実に汚い町で、有名な共同印刷だと凸版印刷などがあって、社長や何かは西片町の高台に住んでいるわけです。ところが共同印刷の周辺は、路地に入るとそこがハモニカ長屋、まさに「太陽のない町」です。何が起こっていたかといいますと、「文京地区、ナンタイ協」というのがあったのですけれども、今の学生に聞けば難病対策協議会と思うでしょう。ところが違う。「南京虫対策協議会」というのです。それは文京の区議会でも本当に超党派で、それから医科歯科大の公衆衛生の先生たちも本気を出し

て取り組んでいた。それから労働組合や地域各組織が全部出て、南京虫撲滅運動をやっていたのです。それで私はそこにセツラーとして入ったのです。

せっかく医学部に来たので、私も何か医学的に貢献しなくてはいけないというように考えました。一晩に人間の身体に何匹南京虫が襲ってくるものかを調べようと考えました。布団の周りにはえ取り紙をおいて、朝起き、はえ取り紙を見れば何匹か寄ってきた奴が捕まるはずだというような実験をした。また、モルモットをおい人間の大きさと比較して、これだけのモルモットに何匹いるんだから人間の場合には何匹ぐらいいることになる、その実験がごとごとく失敗したのです。私は仕方ないから、白衣を着て、区役所に行くとき消毒液をばらまく体制があって、それを持って文京の町を消毒して歩いた。そのセツルメントの拠点になっていったのが、氷川下病院。あそこにおんぼろの木造のたまり場があって、そこに医学部の学生、それから教育、それから法律をめざしている連中、いろいろな人が集まっていた。それが私が民医連に突っ込んできた幕開けですね、きっと。

今の学生と、まるで違うなと思うのは、当時は日本自身の中に激しい抜き身の貧乏というのが、目の前にあった。当然のようにその中に医学生もいた。医学生がマンションに住んで、車で学校に乗り付けるなんていう、そんな奴はいやしなかった。仮に経済的にそういう条件を持っている奴だって、そんなバカバカしいことは、みんなからボイコットを食うからしやしない。この45年くらいのあいだに、日本ががらっと変わった。社会もがらっと変わった。その中で日本の若い世代の、ものを感じたり掴んだりするものがらっと変わっている。私たちから見ると、なんて今の日本の学生というのは、非政治的、非社会的、何を考えているんだというように思うことがある。この天下分け目の時代に。

## ●若い医師は世界の現場を踏み

司会 今の学生に聞きますと、比較的将来やりたいことはNGOで、海外でいろいろ貢献したいという学生が結構多いのです。

高柳 多くなってきたのですか。民医連は日本の中で、地域ですっと実践してきた。それに比べてアジアをはじめ世界的なレベルでは、あまりにもほとんど仕事をしてこなかった。時に民医連の紹介を頼まれて海外に出かけていくと、大変な共感を受けます。そんな組織が日本にあるのという評価をされて、もっとどんどん紹介してほしい、力を貸せよ、というような話が返ってくるのです。それで若井先生などがなさっている仕事からヒントを得て、民医連も日本のなかに縮こまって、お山の大将みたいになっているのはまずいし、壁を破ろうというのが、私の個人的な認識なのです。

若井 発展途上国のどこかの国のいくつかにプロジェクトを持ったらいけないですか。

高柳 そう、そう思っているのです。

若井 具体的にそういうふうに関わらないと、第三世界のことは分からないですよ。実際に、一番グローバル化の影響を受けているのは、アジア・アフリカ地域の貧しい人たちですから、その現実を知らないでは、そういった人たちと一緒に歩むということはできません。

高柳 そういう実践とか、体験とか、感覚とかがないと、今度は日本の中でやっていること自身が、非常にかみ合わなくなってくるのでしょうか。

若井 それに関連してですが、医学生の実習で自由研究があって、研究室配属があるのです。そうすると、1学年100人のうち20人くらいが私のところに来たいというのです。

高柳 すごいね。

若井 それでいろいろなところにアレンジして、今、ニカラグアに行っているのもありますし、ネパール、バングラディッシュとかに、みんな行きたいというのが多いのです。彼ら自身が、今のバイオメディカルなものを中心にした医学教育とか、そういったもので本当にいいのかなということを持っているのではないかと。大学でメインストリー

トとして教えられるのはバイオメディカルなリサーチで、実際、先端医療を中心に教えられるわけです。そういう点ではむしろ若い学生たちのほうが、そういうことは盛んに行っているのではないかと思います。

高柳 私は今の学生は全然遅れていると思って、ムカムカしていたのです。

司会 そういった派遣プロジェクトというのは、NGOルートでやられるのですか、それとも政府？

若井 いや、政府というよりも、政府はなかなか難しいので、だいたい私が知っているというか、関連のあるNGOとか、そういったところを中心に。あるいはよく理解してくれるような、JICA（国際協力機構）のプロジェクトで、私がたまたまニカラグアのプロジェクトの国内委員長というのをやっていることもあり、そういうルートを通して、昨日もニカラグアに3人行ったのです。そういったことでいろいろなチャンスをつかまえては、学生たちは実際に行ってみたいと。

司会 それは50年前のセツルメントの海外版みたいなものでしょうか。

若井 学生たちも結構自分で見つけて、今までも3、4人そういう人がいましたが、1年休学し、アジア・アフリカの地域を1年かけて回って来るというのが結構いるのです。

司会 そういう医学生はプライマリケアに、それとも先端医療に戻るのでしょうか。

若井 戻る人もいるのでしょうかけれども、私も実際フォローアップしたわけではないので分かりませんが、たとえその先端医療の現場に戻っても、またどこかで何年かやったあとに、自分は満足しないと思うのです。ですからまたそのプライマリケアとか、プライマリヘルスケアの現場、あるいはJICAとか、あるいはもっとアジア・アフリカとかそういうところで、自分の生きていく道を

探そうというようなことはあると思います。

司会 「国境なき医師団」というのがありますか。

若井 あれはインターンシップがあるのです。

司会 あれはやはりNGOですね。

若井 保健医療系のNGOでは最大のところですね。実際にその現場をつい最近、アフリカのアンゴラというところで見ました。わずかな給料しかもらわないで、だいたい1年、せいぜい2年なのですが、本当にローカルな何もないようなところで働いています。

高柳 帰ってきているお医者さんたちの東京のたまり場の1つが、私がいた大田病院です。大田病院で働いて、また友だちを連れてきたりしているようです。間接的には少しはつながっているのだけれども、先生が指摘されているような面で、民医連が組織的にきっちり自分たちの仕事の1つというふうにはほとんど位置付けてこなかった。

司会 NGOの問題でよく言われるのは、援助のし方と申しますかアプローチのし方で、地域の本当の幸せと申しますか、社会開発を内発的にやるのか、あるいは援助を与えっぱなしにするのかという難しい問題があると思う。地域が医療水準も上がって生活、命と暮らしをよくしていく、自分たちでよくしていくための貢献というものを考えていかなければいけない。その時に、ダブルスタンダードではいけないということがよく言われている。つまり先進国は先進国の理屈でやって、第三世界は第三世界の理屈でやって、こっちはこっちということでは、本当のグローバルな幸せにならないということではないかなと思います。以前キューバが医師団をよく海外派遣しておりましたが。

若井 今でもです。

司会 今でもそうですか。あれはどのようなミッション性と申しますか、思想で行っているのですし

うか。国境なき医師団と同じような感覚で出しているのですか。

若井 キューバには私も行きましたが、1つは、キューバは医者あまりなのです。

司会 あまっているのですか。

若井 ええ。医者を中心にしてヘルスケアを構築してきたので、看護師の数のほうが少ないのです。それで発展途上国の至る所に送っています。実際キューバがあれだけ保健医療で先進的な働きをして、先進医療もやっていますし、プライマリケアのレベルでもやっているのです。とくに中南米とアフリカを中心に、たくさんの医者を、うんと山奥とかに派遣しています。彼らがその後どうなるのかということを見ると、非常に難しいと思うのです。医者を中心でやってきた保健医療でしたので、看護師とかあまり育っていないのです。そういう問題がありますけれども、でもカストロの偉いところだったと思うのですが、やはり基本的に人々の健康の問題を中心に据えて国造りをやってきたのです。それで米国の圧力に屈せずに行ってきたということがやはり、あれだけ目と鼻の先にある国でよくやってきたなと思います。カストロもだいたいぶ年をとってきて、非常に小さいストロークですけども麻痺を起こしたり、実際には発表されませんでしたけれども。対米政策としてはかなり米国と一緒にやって行かなくてはいけないという方向に急速に進んでいます。

高柳 余談ですが、9.11の前後に、向こうの女性の厚生大臣みたいな人が全日本民医連に現れる予定だったのです。それで文京区にある健生病院の胸部外科の木村文平氏が連れて行くから話をしてくれというので、楽しみにしていたが、9.11で来日が中止になってしまいました。

## ● 仏教と医療、宗教と社会問題への取り組みの伝統

日隈 さっき仏教の話をおっしゃったのですが、宗教的な遺産というか、伝統というものをどう考

えるかということ。それは考え直さなければいけないと思っていますのです。たとえば、古代や中世に、寺院で医療をやってきた。奈良の般若寺などはハンセン病患者の救済にあっていたお寺だったのです。そういう古代からの伝統があった。けれども近現代になって、医療施設が発展して、つまり公的な医療というのができる。社会保障というものもやれるようになってきた。そうすると、そういうところから宗教は後退していく。それは歴史の歩みなんだ、進歩なんだ。後退したら何をするかといったら、それはいわば人間の内面の問題、心の問題に限定されていく。それはむしろ宗教の純化なのだという考え方がありました。

しかし、今、考え直さなければいけないなと思っていますのです。古代や中世において宗教のもっていた医療の行為というものをどうみるか。私はそれはもっと積極的に評価していかなければいけないのではないかと。単にその当時に公的医療がなかったから、宗教やお寺がそれを代わりにやっていたというものではないのではないかと。

もう1つはこういう面もあります。たとえば簡単に言うと宗教、教団が社会事業などをやるのは、それは邪道までは行かなくとも、宗教本来のあり方ではないと。これは実は1950年代の終わり頃、有名な仏教学者ですが、渡辺照宏という人が岩波新書で『日本の仏教』というのを書いて、現実の問題と取り組まない日本仏教を批判しました。土木事業などいろいろな問題に取り組んだ空海などを高く評価し、親鸞、日蓮などは低く評価しました。当時、この『日本の仏教』は、学界をあげて叩かれましたが。

高柳 渡辺先生がやられた。

日隈 つまりその当時の、私たちの常識というのですか、それ、宗教というのは本来、医療だとかそういうものに関わるものではないのだと。本来、心の救済なのだからというらえ方がどうしてもあった。ですからそういう両方の面から見て、歴史的な遺産としての宗教を考え直すことと同時に、先ほど問題提起された、現代の宗教の取り組み方、それはどうだろうか。それについて言えば、日本の仏教教団は大変遅れていると思います。ようや

く、例えば国際的NGOでいいますと、アユスという若手中堅のお坊さんたちの組織ですが、そういうものが生まれておりますし、有志のボランティアの組織や、例えばカンボジアで井戸を掘っているお坊さんが出てきている。終末期医療に取り組むところも出てきた。けれどもそれが教団となると、それは大変なのですね。

最近、西本願寺が、戦争中に出した本願寺からの通達の失効宣言を出したのです。ようやく、60年近くたってね。これは国政の段階でいうと、明治憲法と教育勅語の失効宣言というのは、戦後いち早く国会でやったわけです。それをまだ蒸し返す勢力があるわけですが、教団ではそれがずっと生きていたわけです、実際は効力はなくても。戦争中、本願寺でいいますと、親鸞の『教行信証』の中に天皇批判があるのです。そういうところを削除するとか、戦争中そういうのをずっとやっているわけです。それを失効すると。これを初めて、60年近くたって本願寺がやった。それぐらい教団の保守性は根強いですから、なかなか現代世界に対して教団レベルで発信するというのは、難しい面があると思います。しかし私は希望を持っています。そういう若い人たちに協力しなければいけないと思っています。

**司会** ヨーロッパで近代的国家ができる時に、チャリティーを担っていた宗教、教会のところが、だんだん公的な国家に、そういった福祉、病院だとかいろいろな福祉的なサービスを移行していくということがあったと思います。それが今また、政府の失敗とか、市場の失敗とかということで国家の役割が縮小に向かい、民衆とか市民自らの手で、いろいろ国内のこともグローバルのことも、取り組んでいかなきゃいけないという、新しい動きが出てきた。

また教団全体の保守性云々というのは、やはり、カトリックの場合でも、例えば、一時「解放の神学」というのが、バチカンからがが言われたということもありますし、一方で、ヨーロッパでいうと1931年ピオ11世の回勅「クワドラシモ・アンノ（40年目）」が、社会正義を実現しななきゃいけないというスローガンを出して、ファシズムとスターリン主義的な共産主義に対抗して、非常に

個人を大事にする、ヨーロッパでいうと人格主義的思想というのが出てきて、それは大きな役割を果たしてきたのだと思います。また、聖書を読むと、やっぱりキリストは癒しの人で、病気とかを治したからみんなに信用されたというところがあるんじゃないでしょうか。

**若井** それはもちろんあります。でもそれ自体が中心的なものではないですね。結果として癒されるのであって、癒されるために信じるというものではなかったんですね。メッセージとしては。

**高柳** もしそうだとすると、それはもうほとんど新興宗教の領域ですよ。「病は治るし、商売繁盛」という調子の。

**司会** キリスト教は、貧困者に対する救済ということをかなり重視していたという普遍性を持ったと思いますね。日本では貧困の問題は、なんとなく隅に置かれてしまうけれども、実は、われわれの豊かさとかこの国の貧困が密接にリンクしているという意識がないと、結局、自分達の豊かさも、どんどん崩れていくという危険が今あるのだらうと思います。

**日隈** ちょっと若井さんにお伺いしたいのですが、カトリックのほうでは、1962年からの第二バチカン公会議がカトリック世界を大きく変える契機になった。そして、1991年にヨハネ・パウロ2世の回勅が出たのです。1891年のレオ13世の回勅のちょうど100周年を記念するものです。

100年前の回勅は、勃興してきたヨーロッパの社会主義思想や労働運動に対して、当時のカトリック世界としてどう対応するかということだったのです。その100周年を記念して、ヨハネ・パウロ2世の回勅が出たわけです。それはソ連などの現実社会主義は敗北したけれども、では資本主義が唯一のものかといえば、そうではないのだと。資本主義のなかには不正や抑圧がある。搾取もあり、云々という、非常に優れた回勅が出たのです。経済学者の宇沢弘文さんが「日本経済新聞」で、実は法王から意見を求められたんだと。この回勅には宇沢さんの考えが反映されているようです。

先ほど言われた「解放の神学」は、確か1968年ですね。コロンビアのメジシンであった中南米のカトリック司教会議で、この中南米の現実をみると、キリスト教共同体と彼らは言っていますが、これを基盤にして解放のために闘わなきゃいかんというふうになっていたんですね。その後いろいろあって、弾圧もされます。法王庁から破門された神父もいてね。先ほど、ニカラグアの話を書きましたが、ニカラグアの内閣にも神父が入ったりして。だから、紆余曲折というか、変動はあるんですが、しかし、ああいう新しい神学が出来て、貧しい、抑圧された人々と連帯し、あるいは連帯するというよりは、その人達とともに、新しい社会をつくっていかうという、これは従来の世界の宗教史では、かつてなかったことだと思っているんです。

私の1つの体験談をお話ししますと、山陰地方でカトリックの学園の先生たちと懇談する機会がありました。当然「解放の神学」の話にもなりましたね。神父さんは、日本は豊かだから、日本には「解放の神学」はいらないとおっしゃるわけです。私は、それは確かに経済的にはアジア・アフリカの諸国から見ると豊かにはなっている。しかし、日本は原爆を受けた唯一の国で、核戦争を防ぐ、核兵器をなくすということでは、日本のカトリックには「平和の神学」が必要ではないでしょうかと言ったわけです。その神父さんというのは広島教区の方ですから、原爆の問題では、それはその通りだという話になって、ようやく対話の接点が見つかったのです。アジアのカトリックの場合、「民衆の神学」という。それぞれ、その土地、民族の「解放の神学」にしていくというのが、60年代からずっと始まって、80年代、90年代と発展してきているのではないのでしょうか。そういう点、プロテスタントの方はどうでしょうか。

司会 プロテスタントは、ばらばらですよ。

若井 それぞれの教派で、それぞれ異なった動きをしていますし、米国で力を伸ばしているのは、非常にファンダメンタルな、原理主義的な、そういう人たちが、かなり政治を動かしています。ブッシュはそういうところに支えられて動かし

ているというところがありますよね。宗教と政治が結びついていく、くっついていくという点では、非常に危険な動きです。

日隈 でも、例えば最初におっしゃった、キリスト教海外医療協力会に、その時に入られた、いわば宗教的信条というのは、どのような。

若井 行こうというのは、ですから、キリスト教徒であり、かつ、医師として、ということですよ。

高柳 私がびっくりしたのは、さっきもちょっとお話ありましたが、台湾に出かけていこうと。もう、決意を固めて、それで中国語も勉強して、実行していくという、その先生の、なんだかちょっと常識はずれの覚悟というか、いったい何によるかという。私もかなり常識狂っているほうなんだけれども、本物の常識はずれの人を、久々に発見した気持ちです。

若井 別にわたしにとっては、常識的なんですよ。

高柳 中国語を勉強して台湾で、それでキリスト教のお話をしているわけでもなくて、医師として仕事をする、そんな覚悟のようなものを持っているのはどうしてですか。

若井 やっぱり、うーん、それはあれじゃないですか、やっぱり医師としては、必要としている人がいれば、どこでも行くという、単純な考え方ですよ。

高柳 単純というのはしつこいですね。

日隈 いや仏教では、例えば唐の時代に鑑真が、何度も日本への渡航に失敗して、弾圧も受けて、最後は目が見えなくなって、それでも日本に渡って、正しい戒律、正しい仏教を伝えなきゃいけないという。そういう、何というかな、宗教的使命感というか、そういうものを、私たちは、もっときちんと評価しなければいけない。そういう意味

で言ったら、アジア・アフリカの植民地時代に、キリスト教のたくさんの伝道師が行った。もちろん、それは当時の帝国主義国の、植民地の拡張の先兵になったという側面はあるのです。しかし宗教的な使命感というものも、もっと再評価しなきゃいかんのではないかと思う。

**高柳** 私はたまたま教育会館で池明観（チ・ミョンガン）さんのお話を直に聞きました。岩波新書『韓国からの通信』の筆者のT・K生です。直で見て、非常にすごいなと、人間を再確認したというような気がしました。クリスチャンですよ、あのかたは。非常に大変な時代を生きてきている。あの独裁の時代、いろいろなネットワークが国際的にもあったみたいですけど、韓国の1つの革命を成功させたキリスト教のイニシアチブというのは、大変なものです。

**日隈** 韓国のいわゆる左翼は弾圧されてしまっていたからね。

**司会** ラテンアメリカで、「解放の神学」のもと、どういう組織が実際にいろいろな地域でつくられるかという、だいたいは自主管理型、協同組合的な組織が多いわけですね。つまり、「解放の神学」に基づいて、人々が貧困から立ち上がるために、自分たちがどういう組織をつくって、生産をしたり自分たちの利益を守ったりするかという時に、私どもの言葉で言うと、非営利・協同組織が、かなりラテンアメリカでも組織されている。それが実際の、例えば自分たちで工場をつくるか、共同住宅を建てるために組織するとか、あるいは、ちょっとした信用機関をつくるとかする。先ほど言ったカナダのデジャルダンにしても、第三世界に支援するときに、魚を与えるのではなくて、魚を捕る方法を教えるということで、どうやったら自力更正ができるかということで、非営利・協同組織をつくっていこうというような支援をしています。それは、一番最初に、いわゆるNGOとNPOは違うとおっしゃったように、今の日本的な動きは、確かに、雨後のタケノコのように怪しげなのができて、自分たちの利益のために実はやっているということで、社会的なミッション性、政

治性というものが極めて欠けているわけです。実際、世界でいろいろ真面目にやっている組織とか、そういうものは自分たちの社会的使命というもの、あるいは社会的価値というものを明確に出しつつやっている。最近では、社会サービスの分野、福祉の分野で、やはりそういった非営利・協同組織、社会的連帯とか、社会的使命、社会的責任をもった事業組織というものを広げていくことが大事だ、というふうに議論が進んできているのです。そのなかで、そういうことをやってきた中心的な組織は、ヨーロッパでいうとキリスト教的な母体をもったところが中心になってきたというのが特徴的で、その使命感というのは、宗教者は、個人的な価値観から根ざしているわけですけど、無宗教な人は、比較的になか組織に寄り掛かったり、属性が私自身というところにあまり立たなくて、自分はこういうところに属しているメンバーだからとか、そういうところで踏ん張りきれないような、視野が狭くなる場所も、一部、あるかもしれない。

## ● 今後の非営利・協同の世界で果たす役割

**高柳** 私がNPOというのをかなり意識しているのは、日本でも、世界的に見ても、やっぱり帝国主義的な流れと、今の時代の新自由主義的な流れとを、断固拒否しなきゃいけないと思っているのです。そんな力がどこで形成されるかという1つの場として、NPOを重視しています。NPOでは、具体的な、直接的なサービスを生みだしたり分け合ったりということが第一ですけども、同時にそこで、今までパワーを持ち得なかった人たちが、具体的に実践しながら力をつけていく。批判されているように、NPOには国家論が弱いようです。国家論なしのNPO運動というのは、あてにならない面があります。私がセツルメントの時に、ブントの諸君は「お前、ゴミ掃除やっているのか、日本の社会の矛盾をね、お前がやっているのは隠蔽していることなんだ」、矛盾を激化させて民衆を立ち上がらせる、そんな議論だった。ところがそこに具体的に、ゴミ掃除をしながら、たくさんの人が力をつけていく、力をつけ始めて

いるらしいという考えに僕は立っていた。まあちょっと願望も入っているんだけど。政治的な現局面の課題は、はっきりしてきている。世界銀行とかWTOとかのやらかしていることを、断固やっつけるというなかに、NGOもNPOもありやしないかというふうに思っているのですけれども。

司会 ヨーロッパの動きを見ていますと、NGOとNPOは、比較的リンクしているような気がするのです。というのは、例えば若井先生たちの編集した本にも書かれていたトービン税導入の問題は、ヨーロッパでは5年くらい前に、国際的社会的連帯基金を設置しようという動きがあって、GNPの3パーセントぐらいを連帯税として、第三世界にやろうということが、かなり、国内のいろいろな社会運動団体とか、非営利・協同組織とか、あるいは労組が中心になって行っていたわけです。そういう点では、日本の運動に比べると、ナショナルな問題とグローバルな問題は、運動している人たちにとっては、割とリンクして考えられているというところがあると思います。日本のいろいろな平和運動とか社会運動は、ヨーロッパに比べると、あんまり海外支援をしない。表敬訪問的なことはやったりするけれども、先ほど、若井先生がおっしゃったように、具体的なプログラムでつながらなければわからないということを、これから大事にしていかないと、単なる表敬訪問みたいなもので、終わってしまう危険があります。

若井 民医連もどこかに、プロジェクトを持ったらいんですよ。いくらでもありますからね。要請はありますから。

司会 ニカラグアに一緒に行くとかですね。

高柳 若い研修医なんかも行ったらいい。

若井 1週間でも2週間でもいいですから、まずは見てきてから研修するとか、あるいは研修終わってから見に行くとか、そういうプログラムをもっと非常にいいと思いますね。研修必修化に来年年度からなるために、2年間は病院にはりつけられてしまいますから、そういうところで、その前に、

頭が新鮮なうちにやらないと、2年間の研修必修化のなかで埋もれちゃいますよね。自分はどういうことやりたかったのに、というのが、だんだん忙しいなかで、こき使われてしまうということになりますので、ぜひ、そういうプログラムをやられたらいいと思いますけれどね。

高柳 若井先生の本で、人間の価値が、先進国とこんなに違うと、何百万円で何人救えるんだと書いていますが、これはもうとても印象深いですね、あれは。これは先生の実際のネタですよ。

若井 いろいろ考えたネタです。

高柳 脳外の手術にいくらかかると。これを持って行って何人救えるだろうと。

日隈 衛星テレビで、アメリカの医療のことをやっています、アメリカでは保険に入っていない人は4,400万とかいるという。いかに医療を受けられない人が多いか。また何かの手術をしたが、何十万か何百万か請求されて、払えないから破産する人もいるという。

若井 日本もなりますよね。自己負担がどんどん増えていきますね。

高柳 それですってんてんになってね、自分の家も売っていった。すってんてんになって、仕方がないから家族ぐるみでホームレスという。日本の中にも南北問題が、強烈な勢いで生まれつつありますね。それに拍車がかかってきますからね。なんとか、もちろん日本だけ幸せになろうなんて馬鹿なことではできないけれども、かなり有機的に局面をとらえれば、可能性はちょっとありそうな気がしますけどね。どうも政治の反動的な流れのほうに激しくて、ややこうね。しばらく絶望のほうに向かっていくのかなんていうね。世界を見ていて、若井先生は日本の現状をどんなふうに見ていますか。

若井 日本の政治には、明らかに方向がないですからね。むしろ、日本の場合は、外からの圧力に

弱いじゃないですか。だから、そういう点では、例えば外で働いている日本のNGOの人たちが、逆に、外から日本のなかに発信していくということを、もっと積極的にやる必要があると思いますね。NGOで自分たちがこう、自己満足と言ったら悪いですが、自己満足的に完結してしまうのではなくて、政治的な発言、あるいは政治的な動きというですね、NGOだから政治的であってはいけないということは決してないので、むしろNGOだからこそ、非常に政治的であるということ、いい意味で政治性ということやはり強調しなくてはならないだろうと思いますよ。

高柳 若井先生は私より政治的だなと思っているのよ、あきれ返った。僕はかなり政治的な人間だと思ったのに、こんなにしつこく政治的に考えている人がいたのかと。前の本『学び・未来・NGO』時は、とても、こう心が休まるような、癒しで読んだ。『平和・人権・NGO』の方はかなり戦闘的ですね。

若井 戦闘的ですよ。

## ● 賀川豊彦について

日隈 賀川豊彦にふれますと、おっしゃったように、彼は非常に多面的な活動をした人ですよ。もちろんキリスト者としての宗教活動、それから平和運動、労働運動の仕事をしている。あの1921年の川崎・三菱造船所の大争議、まだ日本共産党のできる前の年で、そういう意味では先駆的な労働運動の指導者です。

それから、水平社の運動、つまり部落解放運動。政党設立活動もしたし、おっしゃったように協同組合運動や、今の神戸の灘生協なんかの生協運動の先駆者でもあり、日本農民組合の運動もしました。そういう意味では驚異的な人で、それだけに、戦後アメリカは、彼に非常に期待したこともあった。

ただ、部落問題では、彼は部落人種起源論を展開した（『貧民心理之研究』）。キリスト新聞社が賀川全集を出したとき、最初はそのまま載せてい

たのです。これに解同系のグループがくらいついたのです。歴史的な文献ですから、載せて、ちゃんと正しい解題をつければいいですよ。攻撃されたので、今度は削除しちゃったんです。それでは正しい賀川像が伝わらない面が生まれていると思います。あの当時は、社会科学的な部落問題の研究というのがまだまだですから。彼がまだ20代の若い頃です。

司会 イギリスの社会学者のアンソニー・ギデンズが『社会学』という本を書いているのですが、その中に、日本の部落民という記述が10行ぐらいあって、エスニックグループと書いています。それは一種の誤解ですが、でも、彼らから見ると他に理解のしようがないのですね。

ヨーロッパにはジプシーとか、移民とか、エスニックがいて、彼らは少数人種民族だから、これを差別するというのはある意味で理屈がつけやすい。しかし、日本で、同じ日本人を、単に貧困で差別するのはわかりますけれども、部落差別というとまったくロジカルじゃないので、あのギデンズさえも、それはおそらくエスニックグループだからだろうと考えるのが当然だと思いますよね。

だから、賀川豊彦が当時そういう認識をしたということについては、アカデミックな文献としてはきちっと残すというのが、賀川の全体像を見るのに大事だと思います。

日隈 賀川夫人が、あとで、「賀川のこの27歳の時の書物は、その後72歳の逝去の日までの永い活動そのものを通して、訂正し償ってきたことが明らかになることが、大切ではないでしょうか」と述べていることを鳥飼慶陽牧師が紹介しています（『賀川豊彦と現代』）。そういう毅然としたものが、出版社にもほしかったと思いますが。

司会 あの当時、賀川がなぜあれだけの精神的な社会思想とか、運動観を持ったかということ、やはり当時の世界のキリスト教の動きからそうとうのアイデアと情報ももらっているのだと思います。そうでないと、あれだけの運動はできないと思います。

歴史的には、日本のいろんな社会運動の先駆的

な人々の中には、キリスト者が多く含まれていたと思います。

**日隈** おっしゃるように、初期の労働運動、社会主義運動の指導者の多くはキリスト教の出身ですから、キリスト教とのつながりは非常に強い。

それからもう1つ、さっき言い忘れたのですが、賀川の多面的な活動の1つに関東大震災での救援活動があります。だからそれは今度の兵庫の大地震のボランティア活動などの、本当の先駆的な活動をした人ですよ。

上京して、関東大震災だけではなくて、その後のいろんな震災の救援活動もします。労働運動、農民運動、平和運動、それから部落解放運動に、そして、救援活動。その上に、いやその上じゃなくて、もともとその土台にあるキリスト教の、宣教活動というのがあって、そういう意味ではものすごく多面的な人だったと思います。NGO、NPOの元祖みたいな人ですよ。

## ●NGO、平和、人権

**日隈** NGOの資金は、どういうふうにしているのですか。

**若井** NPO、NGOでもメディアに出ると資金が集まりやすくなるんですね。

**司会** 政府的非政府組織というGNGOというようなものもある。

**日隈** 若井先生が書かれたのは、その中で優れたNGOを編集されたのだろうなと思います。

**高柳** それはそうですね。

**若井** いい加減なNGOは本に出していません。

**高柳** 本物はこれだと。

**日隈** そのように感じましたよ。

**高柳** 私はエイズの話を担当した先生の話などを

みて、頑張れば何とかなるんだというメッセージに、ちょっと圧倒されましたね。ブラジルなどでも、頑張ってみんなが要求し始めると、政府が薬を確保し始めている。最初のうちはほとんど絶望的な感じでしたが。

**若井** 今や、エイズの薬は非常に安価に、1人に対して1日1ドルぐらいの値段で提供されるようになりましたけどね。ですからそれも、ある意味でこう、世界的なNGOのネットワークの力で、WTOとかそういった、それから先進8カ国のいろいろな政策に対して、対抗する形で、NGOが全体としてまとまって動いた1つのいい例ですよ。

**日隈** しかし恐るべきは、貧困の危機の中のエイズ蔓延。それへの治療・対策を大製薬会社が妨害するんですからね。これはもうビックリした。

**高柳** ビックリしますよね。その中でいちばん一生懸命に旗を振っているのは日本だというのがね。日本の外務省と製薬会社が。たまたま日本人が知らないだけですね。

**司会** 狭い顔の見える範囲としてのローカルコミュニティだけではなくて、やはり、グローバルコミュニティということも視野に入れて、今後NGOとの協力、協同ということを進めながら、両方のコミュニティをローカルにもみるし、グローバルもリージョナルに見ていく、そういう協力関係をつくらなければいけないということが、今回この座談会を通じて非常に感じたことであります。最後に一言ずつお願いします。

**若井** 先ほど話は全部してしまったことですがけれども、NGO（私はNPOという言葉は嫌いなのです）で働くにしても、あるいは、どこで働くにしても、自分の政治的姿勢というのは絶えず問われていくと思います。それはいい意味での政治性というものを、1人ひとりもっていることだと思います。

そうでないと、私たちがどこに自分が立っているのかということを見失ってしまうと思います。

それは今、私が大学の教員をしているという中で、やっぱり大学の中にもってしまって、学生を指導したりそういったことだけ、研究をやっているだけでいいということに止まってしまう危険性というのはいつもあるのです。

ですから、そういう点でいつも、ある意味NGOに関わったり、人々の中に入っていったりすることで、絶えず自分がリフレッシュされていくとか、新たな展開に自分がチャレンジしていくことができるのではないかと考えています。

**日隈** 先ほど私、世界を動かす原動力の1つとして、植民地体制の崩壊に触れましたが、それが単に崩壊しただけじゃなくて、非同盟諸国運動、非同盟運動として大きく発展して、国連の中でも大きな位置を占める。それに対して国連の決議を無視して、イラク侵略をやっているような米英との、ここも闘いですね。それは政治的な闘いだけではなくて、実は、その非同盟諸国、非同盟運動の中心になっている、アジア、アフリカ、ラテンアメリカ、中東での貧困がますます増大し、そういう貧困を原因とする諸問題が深刻化している。それにもっと目を向けていかなきゃいかんと思います。

それではどういう社会を目指すのかというと、従来のような社会主義体制というのは崩壊すべくして崩壊したわけで、しかし、利潤第一主義というのは、依然として世界を支配している。これを乗り越える社会を創っていく。それは私たちのこれからの実験でもあるし、これはいろいろな思想、信条、宗教の違いを超えた人たちとの協力以外に、あり得ないのではないかと。私は自分の専門の分野が宗教ですから、とくに宗教者、宗教団体のみならずと力を合わせる以外には、それはつくり出せないのではないかと、というのが感想です。

**高柳** 私はこの本を読ませていただいた時から、かなりたくさん、いろいろな勉強をしましたけれども、この構造的暴力、今、日本が積極的にそれを拡大するような方向に動こうとしているという意味で、日本の憲法の問題というのは極めて重大な

局面にあると思います。

**日隈** そうです、そうです。若井さんが、御本の最初に日本の憲法を、日本から発信せよということをおっしゃっている。

**高柳** それで具体的には、片方で戦争で、片方でその生存権を奪っていくという、国民自身も被害者になっている。他では加害者になっていくという、今の憲法をその平和的生存権というところががちりおさえて、それで広範な人たちとディスカッションを巻き起こして、それで日本の支配層が意図していることを根本的にえぐり出すとか、共通の認識にしていく。そこに、抵抗の力が形成されてくる可能性というのが、60年の安保、いろいろな労働戦線とか学生運動とか、そういうのが後退していますけれど、一方で、NGO、NPO、いろいろな意味での市民層の自覚という力量も高まっている。その共通のテーマになるというか、ここはちょっとこの2、3年勝負なんじゃないかなというふうに。

**若井** 多分そうですね。

**高柳** ここでちょっとゆるんでみると、まあ長い歴史を考えれば「やがてその矛盾も克服される」なんて書かれたりね。その間にこっちがこてんこてんになってるなんていうんじゃないかね、どうも面白くないと。

**若井** 憲法第9条はやっぱり死守するという立場で、市民として動かないといけないと思います。今回の選挙にしてもそうですけれど、それが曖昧になってきて、そのうち憲法改正されているという危険性があると思います。

**高柳** 今の発言を1ヶ月前ぐらいにすれば、選挙の役に立ったけどね。

(2004年7月9日実施)